３．ミニトマト

・殺菌剤

FRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
M1	（銅水和剤） ＩＣボルドー６６Ｄ	散布	－	－	
	Ｚボルドー	散布	－	－	
	ドイツボルドーＡ	散布	－	－	
－	（ダゾメット） ガスタード微粒剤	土壌に本剤の所定量を加え十分混和する。	は種又は定植 21 日前まで	1 回	
	バスアミド微粒剤	土壌に本剤の所定量を加え十分混和する。	は種又は定植 21 日前まで	1 回	
24+M1	(カスガマイシン・銅) カスミンボルドー カッパーシン水和剤	散布	収穫前日まで	5 回以内	
－	（クロルピクリン） クロピクテープ	土壌くん蒸	－	2 回以内（但し、床土は 1 回以内、圃場は 1 回以内）	
	クロールピクリン	土壌くん蒸	－	2 回以内（但し、床土は 1 回以内、圃場は 1 回以内）	
M5	ダコニール１０００	散布	収穫前日まで	2 回以内	
1	トップジンM水和剤	散布	収穫前日まで	5 回以内	
M7	ベルクート水和剤	散布	収穫前日まで	2 回以内	
－	マスタピース水和剤	散布	収穫前日まで	－	
2	ロブラールくん煙剤	くん煙	収穫前日まで	3 回以内	

・殺菌剤（参考農薬）

FRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
M1	ドイツボルドーＡ	散布	－	－	
11+7	シグナムＷＤＧ	散布	収穫前日まで	2回以内	
NC	ハーモメイト水溶剤	散布	収穫前日まで	－	野菜類
M7	ベルクート水和剤	散布	収穫前日まで	2 回以内	

・殺虫剤

IRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
4	アドマイヤー１粒剤	植穴土壌混和	定植時	1 回	
6	アファーム乳剤	散布	収穫前日まで	5 回以内	
4	（ジノテフラン） アルバリン粒剤 スタークル粒剤	植穴土壌混和	定植時	1 回	
－	エンストリップ	放飼	発生初期	－	野菜類（施設栽培）
－	オレート液剤	散布	発生初期～ 収穫前日まで	－	野菜類（いちごを除く）
15	カスケード乳剤	散布	収穫前日まで	2 回以内	
13	コテツフロアブル	散布	収穫前日まで	3 回以内	
－	サンクリスタル乳剤	散布	収穫前日まで	－	
11	ゼンターリ顆粒水和剤	散布	発生初期（但し、収穫前日まで）	－	野菜類（はくさい、キャベツを除く）
4	ダントツ粒剤	植穴処理土壌混和	定植時	1 回	
9	チェス顆粒水和剤	散布	収穫前日まで	3 回以内	
5	ディアナＳＣ	散布	収穫前日まで	2 回以内	
11	トアローフロアブルＣＴ	散布	発生初期（但し、収穫前日まで）	－	野菜類
28	フェニックス顆粒水和剤	散布	収穫前日まで	2 回以内	

IRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
－	プリファード水和剤	散布	発生初期	－	野菜類（施設栽培ただしいちごを除く）
UN	プレオフロアブル	散布	収穫前日まで	2 回以内	
28	プレバソンフロアブル５	散布	収穫前日まで	3 回以内	
28	ベネビアＯＤ	散布	収穫前日まで	3 回以内	
15	マッチ乳剤	散布	収穫前日まで	2 回以内	
18	マトリックフロアブル	散布	収穫 7 日前まで	3 回以内	
4	モスピラン顆粒水溶剤	散布	収穫前日まで	3 回以内	
7	ラノーテープ	作物体の付近に設置する	栽培期間中	1 回	野菜類（施設栽培）

・殺虫剤（参考農薬）

FRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
9	コルト顆粒水和剤	散布	収穫前日まで	3 回以内	
23	モベントフロアブル	散布	収穫前日まで	3 回以内	
UNF	ボタニガードＥＳ	散布	発生初期	－	

使用回数はその薬剤の使用回数を記載しており、この他に薬剤に含まれる成分毎に、総使用回数が決められているので、農薬ラベル等を確認してそれを超えないように注意する。
注1）薬剤抵抗性の出現を防ぐため、「FRACコード」や「IRACコード」を参考にしながら他系統剤とのローテーション使用を心掛ける（「薬剤抵抗性管理」参照）。
注2）農薬登録上の作物名が標記の作物名と異なる場合、備考欄に記載した。
注3）蚕毒・魚毒については、「56．野菜類の総括注意」も参照する。

病害虫名（Ｆ：菌類病、Ｂ：細菌病、Ｖ：ウイルス病、Ｏ：その他の病原体）

病害虫名	防除時期	防除方法	注意事項
苗立枯病（Ｆ）	は種前	1. 無病の床土、又は焼土を使用する。 2. 発病株は直ちに抜き取る。 3. 床土消毒の項を参照する。薬剤で消毒する場合は、クロルピクリン剤、又はダゾメット剤（ガスタード微粒剤、バスアミド微粒剤）を用いる。	1. 灌水は午前中に行い、低温多湿にならないようにする。
萎凋病（Ｆ） 根腐萎凋病（Ｆ） 半身萎凋病（Ｆ） 褐色根腐病（Ｆ） 青枯病（Ｂ）	は種前及び定植前	1. 土壌消毒の項を参照し、対象病害に登録のある薬剤で消毒する。 2. 萎凋病（レース１、２）、根腐萎凋病、半身萎凋病（レース 1）には抵抗性品種、又は抵抗性台木を使った接木苗を用いる。 3. 褐色根腐病には、抵抗性台木を使った接木苗を用いる。 4. 発病株は直ちに抜き取り、ほ場外に埋却する。 5. ナス科作物を連作しない。 6. 排水を良好にする。	1. 萎凋病、青枯病は夏期に発生が多い。 2. 接木をする時、ウイルスの感染に注意する。
疫病（Ｆ）	５月下旬～９月中旬	1. ＩＣボルドー６６Ｄの 50 倍液、Ｚボルドー、ドイツボルドーＡの 500 倍液、ダコニール１０００の 1,000 倍液のいずれかを散布する。	1. ６月下旬～７月上旬と８月中旬～９月上旬に多発する。 2. 薬剤は７～10 日毎に散布し、降雨の多い時はさらに散布回数を増やす。

病害虫名	防除時期	防　除　方　法	注　意　事　項
葉かび病（F）	5月上旬～9月中旬	1. ベルクート水和剤6,000倍液を散布する。 ［参考農薬］ 1. ドイツボルドーA500倍液、又はシグナムWDG2,000倍液を散布する。	1. 特に、ハウス栽培で発生しやすい。 2. 施設内の通風を図る。 3. 病原菌は主に葉裏に寄生しているので、薬液が葉裏によくかかるよう散布する。 4. ベルクートは、幼果期のメロン、ばらに対して薬害を生ずるので、かからないようにする。 5. ベルクートは、蚕毒に注意する。
すすかび病（F）	5月上旬～9月中旬	［参考農薬］ 1. シグナムWDG2,000倍液を散布する。	1. 特にハウス栽培で発生しやすい。 2. 施設内の通風を図る。 3. 病原菌は主に葉裏に寄生しているので、薬液が葉裏によくかかるよう散布する。
輪紋病（F）	5月下旬～9月中旬	1. Zボルドー500倍液を散布する。	1. 発生初期に防除する。
灰色かび病（F）	6月上旬～9月中旬	1. トップジンM水和剤1,500倍液を散布する。 2. 施設では、ロブラールくん煙剤によるくん煙法を用いると、施設内の湿度上昇を軽減できる。方法は、「54. くん煙法」を参照する。 ［参考農薬］ 1. シグナムWDG2,000倍液、又はベルクート水和剤6,000倍液を散布する。	1. 主に施設栽培の多湿条件下で発生するので、通風を図る。除湿機の利用も有効である。 2. 同一剤は過度に連用しない（耐性菌の出現回避）。
菌核病（F）	生育期間	［参考農薬］ 1. シグナムWDG2,000倍液を散布する。	1. 主に施設栽培の多湿条件下で発生するので、通風を図る。除湿機の利用も有効である。
うどんこ病（F）	生育期間	［参考農薬］ 1. ハーモメイト水溶剤 1,000倍液、又はシグナムWDG2,000倍液を散布する。	1. 肥切れ等により、株が弱ると発生が多くなる。
かいよう病（B）	は種前	1. 種子は、55℃の温湯に25分間浸漬する。 2. 多発ほでは連作しない。	1. 苗床消毒と支柱消毒を合わせて行う。 2. 芽かきは、晴天日に行う。 3. かいよう病はイムノクロマト法により簡易診断できる。 4. 手や刃物に付着した菌により伝染するので注意する。 5. マスタピースは生物農薬である（「56. 野菜類の総括注意」参照）。
	生育期間	1. 発病株は直ちに抜き取り、ほ場外に埋却する。 2. カスガマイシン・銅水和剤（カスミンボルドー、カッパーシン）水和剤1,000倍液、又はマスタピース水和剤2,000倍液を散布する。	

病害虫名	防除時期	防　除　方　法	注　意　事　項
モザイク病 （　Ｖ　）	定　植　前 （ＣＭＶ）	1. ＣＭＶワクチン接種苗を用いる。 2. 育苗中は寒冷紗被覆を行うか、 幼苗期からアブラムシ類の防除を行う。	1. 晩まきなど抑制栽培で発病が多い。 2. ＣＭＶワクチン接種苗の効果は、ＣＭＶによるモザイク病だけに有効である。このため、現場で発生しているウイルスの種類に注意する。 3. ＣＭＶワクチン接種苗は、品種の違いや気象条件によって生育が抑制されたり、軽いモザイク症状が認められる場合もあるので、ＣＭＶ発生の恐れがない地域では使用しない。 4. ＣＭＶ感染の有無はイムノクロマト法により簡易診断できる。
	生 育 期 間	1. 周辺雑草などの感染植物を除去し、障壁作物（トウモロコシ、麦等）を栽培する。 2. 発病株は抜き取り、ほ場外に埋却する。 3. ＴｏＭＶに対しては、抵抗性品種を採用する。 4. 施設では、戸窓に防虫ネット(0.8㎜目合い)を張って媒介虫の侵入を防ぐ。	
黄化えそ病 （ＴＳＷＶ） （Ｖ）	生 育 期 間	1. アザミウマ類を防除する。 2. 周辺雑草は伝染源となるので、定期的に除草しほ場衛生に努める。 3. 発病株は抜き取り、ほ場外に埋却する。 4. 施設では、戸窓に防虫ネット(0.4㎜目合い)を張って媒介虫の侵入を防ぐ。	1. 本ウイルスは、アザミウマ類により伝搬される。 2. ＴＳＷＶ感染の有無は、イムノクロマト法により簡易診断できる。
ネコブ センチュウ	定　植　前	1. 土壌線虫の項を参照する。	
オンシツ コナジラミ	定　植　時	1. ダントツ粒剤を株当り１ｇ植穴土壌混和する。	1. マルハナバチを利用する際は、本剤処理後20日目以降に導入する。
	生 育 期 間	1. ベネビアＯＤの 2,000 倍液、又はチェス顆粒水和剤 5,000 倍液を散布する。 2. サンクリスタル乳剤300倍液を虫体に直接かかるように７日間隔で２回散布する。 ［参考農薬］ 1. モベントフロアブル 2,000 倍液、又はコルト顆粒水和剤 4,000 倍液を散布する。	1. 多発してからでは十分な効果を上げることができないので、発生初期から防除を行う。 2. ベネビアに関する注意事項 (1) 展着剤を加用すると薬害が生じる場合があるため、展着剤は加用しない。 (2) アルカリ性の農薬や肥料との混用はさける。 (3) 薬害が生じるおそれがあるので、アミスター（ＱｏＩ剤）の成分を含む農薬、銅剤と混用しない。また、アミスター（ＱｏＩ剤）の成分を含む農薬を散布した場合には、２週間以上間隔を空けて本剤を使用する。 **3. ベネビアは蚕毒に特に注意する（特別指導事項参照）。** 4. コルト、モベントは水産動物（甲殻類）に影響があるので注意する。 5. モベントは蚕毒に注意する。 6. モベントは不稔などの薬害のおそれがあるため、水稲にかからないよう注意する。

病害虫名	防除時期	防　除　方　法	注　意　事　項
オンシツ コナジラミ	生育期間 (施設栽培)	1. 施設の開口部を防虫ネット（0.4㎜目合い）で被覆する。 2. 黄色粘着トラップを設置して成虫の発生消長を把握する。 3. オンシツツヤコバチ（エンストリップ）をトマト25株にマミーカード1枚の割合で放飼する。 4. ラノーテープを10a当り30㎡（幅5cm×200mのテープを３本分）の割合で設置する。 5. プリファード水和剤1,000倍液を散布する。 ［参考農薬］ 1. ボタニガードＥＳの1,000倍液を散布する。	1. 定植時にアブラムシ対策の粒剤処理をする。 2. 成虫の初発を黄色粘着トラップなどを用いて確認したらすぐにオンシツツヤコバチを放飼する。 3. オンシツツヤコバチは殺虫剤に弱いので、利用期間中は殺虫剤の散布を極力避ける。 4. 農薬の散布に当っては天敵に影響の少ない薬剤を使用する（Ⅵ資料1.農薬の天敵等への影響の目安参照）。 **5. ボタニガード及びラノーは、蚕毒に特に注意する（特別指導事項参照）。** 6. ラノーの使用方法と注意事項については、トマトの項「ラノーテープの使用方法と注意事項」を参照。 7.プリファード、ボタニガードは微生物農薬であり使用方法と注意事項については、「1.野菜類」のコナジラミ類の項を参照。
アブラムシ類	定　植　時	1. シルバーストライプフィルムをマルチする。 2. アドマイヤー１粒剤を株当り１～２ｇ、又はダントツ粒剤を株当り１ｇを植穴土壌混和する。	1. ダントツを処理した場合、マルハナバチを利用する際は、本剤処理後 20 日目以降に導入する。 2. オレートは昆虫の気門をふさぎ、窒息させて殺虫するので、虫体に直接かかるように散布する。 **3. ダントツ、モスピランは、蚕毒に特に注意する（特別指導事項参照）。** 4. コルト、モベントは水産動物（甲殻類）に影響があるので注意する。 5. モベントは蚕毒に注意する。 6. モベントは不稔などの薬害のおそれがあるため、水稲にかからないよう注意する。
	生育期間	1. 施設栽培の場合、開口部を防虫ネット（0.8㎜目合い）で被覆する。 2. モスピラン顆粒水溶剤2,000倍液、チェス顆粒水和剤5,000倍液のいずれかを散布する。 3. オレート液剤100倍液を５～７日間隔で２回散布する。 ［参考農薬］ 1. モベントフロアブル 2,000 倍液、又はコルト顆粒水和剤4,000倍液を散布する。	

病害虫名	防除時期	防　除　方　法	注　意　事　項
オオタバコガ	６月～９月	1. 施設栽培の場合、開口部を防虫ネットで被覆すると、侵入を軽減できる。 2. トアローフロアブルＣＴの 500 倍液、ゼンターリ顆粒水和剤、プレオフロアブル、マトリックフロアブルの 1,000 倍液、アファーム乳剤、カスケード乳剤、コテツフロアブル、フェニックス顆粒水和剤の 2,000 倍液、ディアナＳＣの 2,500 倍液のいずれかを散布する。	1. オオタバコガの平年の発生時期は５月下旬～10 月下旬であり、ミニトマトでは６月上旬及び８月中旬以降に幼虫による食害が認められる。この時期にはフェロモントラップによる成虫の発生消長を参考にして、薬剤抵抗性発達回避のため系統の異なる薬剤とローテーションしながら散布する。 **2. アファームは蚕毒及び魚毒に、ＢＴ生菌剤（ゼンターリ）、ＩＧＲ剤（マトリック、カスケード、ファルコン）、ディアナ、フェニックスは蚕毒に、コテツは魚毒に特に注意する（特別指導事項参照）。** 3. トアロー、コテツは蚕毒に注意する。 4. フェニックスは水産動物（甲殻類）に影響があるので注意する。
アザミウマ類	生 育 期 間	1. マッチ乳剤 2,000 倍液を散布する。 ［参考農薬］ 1. モベントフロアブル 2,000 倍液を散布する。	**1. マッチは、蚕毒に特に注意する（特別指導事項参照）。** 2. モベントは水産動物（甲殻類）に影響があるので注意する。 3. モベントは蚕毒に注意する。 4. モベントは不稔などの薬害のおそれがあるため、水稲にかからないよう注意する。
ハモグリバエ類	定　植　時	1. ジノテフラン （アルバリン、スタークル）粒剤、又はダントツ粒剤を株当り２ｇ植穴土壌混和する。	1. ダントツを処理した場合、マルハナバチを利用する際は、本剤処理後 20 日目以降に導入する。
	生 育 期 間	1. プレバソンフロアブル５の 2,000 倍液を散布する。	**1. プレバソンは、蚕毒に特に注意する（特別指導事項参照）。** 2. プレバソンは水産動物（甲殻類）に影響があるので注意する。